

総合地球環境学研究所共催展 湖都大津の災害史

P1～P3

ミニ企画展

大津の小学校 150年

P4

収蔵品紹介

毛利秀包感状

P5～P6 大津絵蔵書票 山内神斧画

大津  
歴博  
だより

2023

No.

129



大津市歴史博物館

令和5年1月15日 発行

〒520-0037 大津市御陵町 2-2

TEL(077)521-2100

https://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

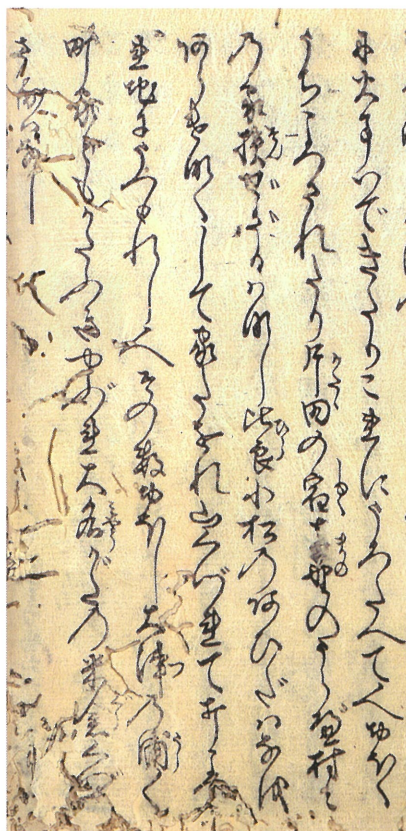
大津市歴史博物館・総合地球環境学研究所共催展

湖都大津の災害史

会期：令和5年(2023)3月4日(土)～4月16日(日)



【写真1】



【写真2】



【写真3】

【写真1】は、「葛川谷絵図」(江戸時代・葛川坊村町自治会蔵)で、寛文2年(1662)5月に発生した地震により崩れた箇所を示した絵図です。その土砂崩れにより町居・榎村が埋まり、山麓を流れる安曇川が堰き止められ、水溜りができたことがわかります。また、【写真2】の仮名草子『かなめいし』(大洲市立図書館〔矢野玄道文庫〕蔵)は、その地震被害の様子について「片(堅)田の宿、真野のうらべ、村々の家損ぜざるはなし、比良小松のあひだはなおあけなくして家たをれ山くづれて(以下略)」と記しています。【写真3】は明治29年(1896)琵琶湖大洪水の浸水域図(栗東歴史民俗博物館〔里内文庫〕蔵)で、未曾有の大雨により琵琶湖岸が水没した様子を知ることができます。

## 「天災は忘れた頃にやってくる」

この言葉は、物理学者・随筆家であった寺田寅彦(1878～1935)が自然災害への向き合い方について、日々の気構えを示したものとされています。近年の天津市内の災害といえば、平成25年(2013)9月の台風による被害(主に逢坂・藤尾・田上地域)、令和3年(2021)8月の大雨による浸水被害(主に山中・南志賀・唐崎)など、まだまだ記憶に新しいのではないのでしょうか。しかし、こうした災害の記憶もいずれ薄れて忘れ去られてしまうかもしれません。いま、改めて災害への向き合い方が問われているといえます。

本展は、天津市域を含めた滋賀県湖西地域の時の経過とともに忘れられてしまった地震、台風、大雨、土砂災害などの自然災害、そして人々の対応(防災・減災・復興)について、古文書・古地図・歴史資料から読み解き、災害への向き合い方を考える一助となることを意図したものです。以下、概要を紹介しましょう。

## 大津を襲った地震

まずは天津市域を襲った大地震についてです。古代・中世の地震に関連した史料は少なく、その実態は捉えにくいのですが、江戸時代になると古文書・古地図などに地震についての記録がみえはじめます。なかでも、寛文・文政・安政年間に起こった地震は天津市内各所に史料が残り、その実態を知ることができます。

寛文2年(1662)地震(近江・若狭地震)は、5月1日(太陽暦で6月16日)に発生したもので、巳刻(午前9～11時)若狭湾沿岸の日向断層の活動(逆断層)と、午刻(午前11時～午後1時)琵琶湖西岸の花折断層北部の活動(右横ずれの断層運動)によって起こった双子地震といわれ、マグニチュード約7.4と推定されています。この時、葛川地域に甚大な被害を及ぼしただけでなく【写真1参照】、滋賀県湖西地域や京都にも家屋の倒壊等が発生しました。この時、浅井了意(？～1691)という仮名草子家がまとめた『かなめいし』には各所の被害の様子が克明に記されています【写真2】。また、天津市内ではこの地震により、膳所城、日吉大社、堅田本福寺といった広範囲の建物が倒壊し、また和邇南浜の御輿が破損するなどして、後年に再建された記録も確認できます。

次に文政2年(1819)の文政近江地震では、琵琶湖東側を震源(マグニチュード6.9と推定)に、伊勢・美濃・

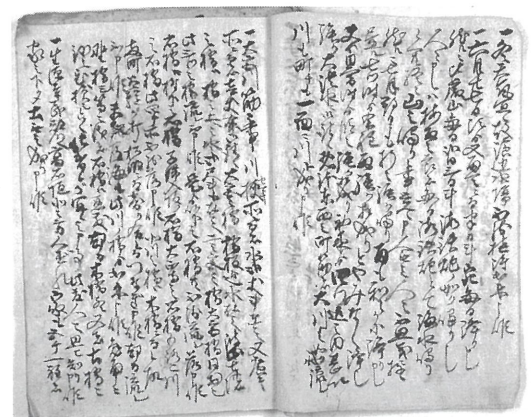
近江に被害が拡がりました。この時、例えば本堅田に残る記録(本堅田村諸色留帳<sup>しよしきとめちやう</sup>)では、村側から領主堀田家(堅田藩)へその被害状況を詳細に記録して報告するとともに、村内の倒壊家屋の再建が順次進んでいった様子が読み取れます。

さらに、安政元年地震(安政伊賀地震)は、嘉永7年(1854、安政元年)6月に伊賀を震源として起こった直下型地震で(マグニチュード7.0と推定)、これ以降、日本各地で地震が連続的に発生し、「安政大地震」とよばれています。この安政伊賀地震について大津

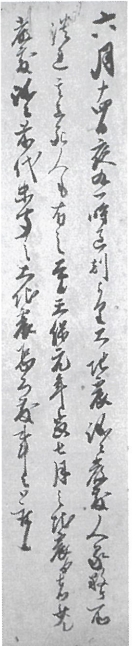
町の天津御用米会所の記録【写真4】では、「六月十四日夜九ツ時過刻より大地震、誠ニ巖敷、人家数ヶ所潰れ、其上死人も有之、去ル天保元年寅七月之地震より者少し巖敷、誠ニ前代未聞之大地震、恐ろ敷事与御座候」と、家屋の倒壊や死者も出る大地震であったことを伝えます。またこの他にも、天津市内各所に残る庶民や武士の日記などに、地震に<sup>おの</sup>慄く様子とその後の復興について記述されています。

## 古文書・古地図で読み解く水害と防災

こうした突発的な災害である大地震に対し、高頻度で発生する水害(土砂災害、洪水等)は、古文書・歴史資料により日常的に記されていることが多いといえます。特に江戸時代は、ひとたび水害が発生すると、幕府・大名などが、領地の被害状況を調査し、救済指示や年貢減免を実施するなど、為政者としての災害対応に向き合う必要が



【写真5】坂本大洪水記 山門公人景山家文書 本館蔵  
安永7年(1778)6<sup>上</sup>～7月に起こった洪水の記録で、激しい豪雨により「東西之町筋者大川之如ク水流レ川も町ちも一面二川ト成リ」と記されています。

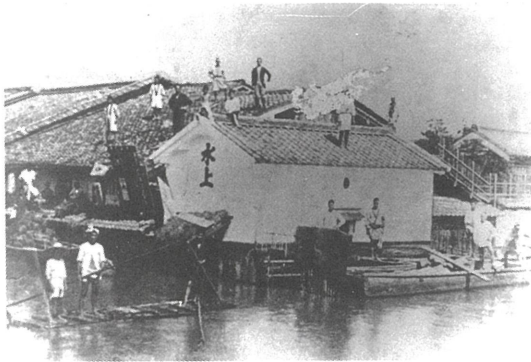


【写真4】大津御用米会所要用帳 本館蔵

ありました。また村・町側では、やはり被害状況を報告したり、あるいは自分たちの手で堤防を修復するために願い出たりと、庄屋文書や地域共有文書の中に災害の実態・対応を示す史料が結果的に多く残されてきました。さらに、地震や災害に関する書物やかわら版が多く発行され、災害の情報が人々の中で共有化されていったともいわれています。

企画展では、大津市内各所の水害に関する古文書・歴史資料を紹介するとともに、特に被害が大きかった田上地域の戸川水害や坂本大水害、瀬田川<sup>さら</sup>の様子、また土砂<sup>どしゃど</sup>留め制度といった江戸時代の土木行政のあり様も紹介します。

近代以降では、明治29年(1896)の琵琶湖大洪水【写真6】や室戸台風の被害なども古写真を中心に紹介する予定です。あわせて、先に述べた平成25年水害など近年の災害についても、本市危機・防災対策課などに残る記録写真とともに展示し、さらにロビーでは大津市内各地のハザードマップ、防災グッズなども展示します。古い時代から現代まで、災害と防災に関する歴史を知っていただく機会となれば幸いです。



【写真6】明治29年琵琶湖大洪水時の大津町の古写真 本館蔵

### 防災・減災 (Eco-DRR) からみた 比良山麓の暮らしと歴史

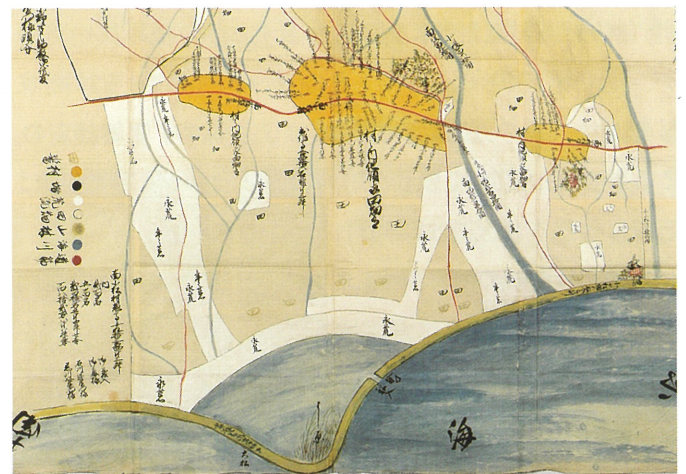
ところで、今回の展覧会は当館だけの企画ではなく、京都にある総合地球環境学研究所との共催企画です。これは同研究所において平成30年(2018)よりプロジェクト「人口減少時代における気候変動適応としての生態系を活用した防災減災 (Eco-DRR) の評価と社会実装」(代表者:吉田丈人)が立ち上がったことが背景にあります。この生態系を活かした防災・減災 (Ecosystem-based Disaster Risk Reduction [Eco-DRR]) とは、環境省の説明によれば、自然災害に遭いやすい土地やその場所の開発を避けて被災の可能性を低減させ、かつ生態系の持続的な管理・保全・再生を行い、災害対応に強い地域をつくることを目的としています。

そしてプロジェクトでは、その具体的な社会実装をおこなうため、全国にいくつか対象地域が設定されましたが、その中の一つが旧志賀町の比良山麓地域だったのです。そこで、特に比良山麓地域の防災・減災について、古文書・古地図から土地利用の実態、各地域で培われてきた防災につながる伝統知・地域知のあり様をさぐるため、研究・調査が進められてきました。当館では、平成29年(2017)に開催した「村の古地図-志賀地域を歩く-」によって蓄積した歴史資料のデータをもとに、さらに地元のご理解を得ながら協力してきました。つまり、今回の展覧会は5年間の研究成果の報告展でもあります。

なかでも、大物地区<sup>だいもつ</sup>の百間堤<sup>ひゃっけんづみ</sup>や比良山麓各所に設置してあった「シシ垣(鹿垣・猪垣)」については、江戸時代～明治時代における土砂災害・洪水・獣害と改修工事の歴史だけでなく、現代まで時間軸を広げ、現在の地域住民の方への聞き取りや踏査調査を踏まえて、人々の防災対策を明らかにしてきました。ここからみえてきたのは、自然災害を避けた土地利用や集落域の形成、また水利や植生を活かした防災対策が地域ごとに代々培われてきたということです。こうした災害と自然の恵みが表裏一体であったこともまた企画展でテーマとするところで、古文書や古地図からその一端をお伝えできればと考えています。(学芸員 高橋大樹)



【写真7】大物区の百間堤(総合地球環境学研究所ドローン撮影)



【写真8】南小松村絵図 江戸時代 南小松自治会蔵  
やなむね  
家棟川や、近江舞子の内湖周辺の白色は「荒流」で、土砂災害や洪水により、作物が取れず免税となったことを示しています。

# 大津の小学校 150 年

地域の子どもたちが、家の近くの学校にそろって通うという日本の小学校制度は、明治時代に始まりました。これ以前、子どもたちが通う教育機関は、庶民のための寺子屋や武士階級のための藩校などに分かれていました。

明治5年（1872）8月に「学制」が公布され、国民皆学の方針により、欧米の教育制度を参考にした近代的な学校制度の整備が始まります。いくつかの地域では、学制に先行してすでに小学校が設立されており、この後、全国的に小学校の設立・開校が進められました。

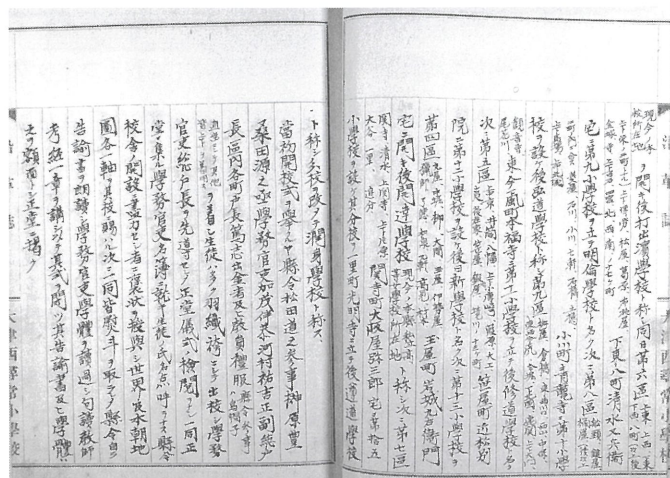
大津市域では、今堅田村で明治5年7月1日に致道学校（現堅田小）がいち早く開校しています。さらに、学制公布から約半年後の明治6年（1873）2月8日、当時の県令（現在の県知事にあたる役職）松田道之（1839～82）が、「小学校建築ニ付告諭書」を發し、滋賀県下の小学校設立を告諭しました。同時に、各町村での学校設立の方法を具体的に記した「立校方法概略」が配布されています。この時期、国・県によって小学校の設立が積極的に勧められていましたが、実際に学校を設立するための財政的な負担や校舎の建設は、地域の努力によるものでした。

明治6～13年にかけて、現在の大津市立小学校の前身にあたる学校が相次いで開校し、その後、幾度にもわたる制度の変化、学校の統廃合や新設を経て、現在の小学校につながっています。

令和5年（2023）は、大津市域の多くの小学校創立年である明治6年から150年となる節目の年です。この機会に、大津の小学校の変遷をミニ企画展でとりあげます。この歴博日よりでは、展示予定の資料から3点を紹介します。

## ○学校沿革誌（明治6～20年） 長等小学校蔵

各学校の歴史を伝える史料として「学校沿革誌」があります。創立の経緯や、学校の設備、教職員や児童・生徒のこと、行事や特徴的なできごとなどを、歴代の校長または校長代理の教員が記録した簿冊で、永年保存文書として保管されています。古いものは残念ながら現存しない場合もありますが、各年代の児童の就学状況などの学校の情報だけでなく、地域の災害などといった学校を中心とした地域史の記録としても貴重な史料です。



写真は、長等小学校蔵の沿革誌のうち、創立当初の明治6～20年の内容が記されている簿冊です。明治6年2月に「市街ノ各区始メテ小学校ヲ設立ス」として、大津市街区に同時期に設立された学校をまとめており、打出浜学校、日新学校、開達学校（以上3校は現中央小）、明倫学校、遵道学校（以上2校は現逢坂小）、弘道学校、修道学校（以上2校は現長等小）、潤身学校（現藤尾小）の名前が記されています。

## ○大津尋常高等小学校の校舎写真（明治時代） 本館蔵



次々と開校した学校は、明治25年（1892）に尋常小学校や尋常高等小学校と改称されました。写真は、大津尋常高等小学校

（現中央小）に大津実業補習学校（大津商業高校の前身）が併設されていた明治38～45年頃の写真です。

## ○皆勤賞標（明治時代） 雄琴小学校蔵



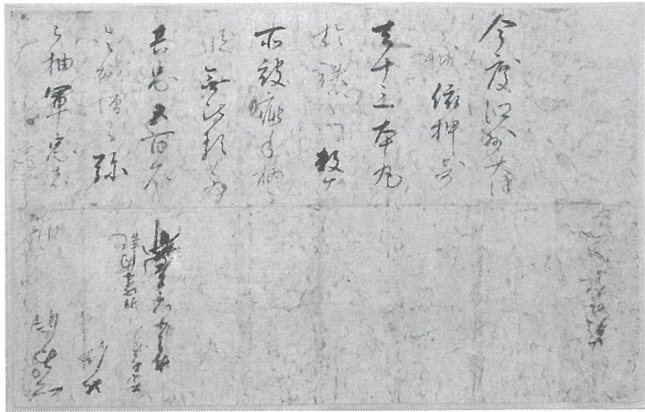
明治20年代に雄琴尋常小学校で配付された皆勤賞です。明治23年（1890）に発布された「教育勅語」に登場する言葉や物語の場面が色刷りされています。

この他に、古い教科書や戦時中に生徒が描いた絵日記など大津の小学校に関わる資料を紹介します。

（学芸員 福庭万里子）

## 收藏品紹介

# 毛利秀包感状



現在、当館では、常設展示室内に「大津城特集ミニ展示」として、令和5年(2023)4月2日(日)まで当館が所蔵、保管する大津城に関する資料を展示しています。本当にミニ展示なので、「え、これだけなん!？」と感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、少しでも興味を持っていただくために、個人的に特にイチオシのものを紹介します。

それは、「毛利秀包感状」です。これは、慶長5年(1600)9月に起こった「大津城の戦い」に関するものです。先にこの戦いについて説明します。慶長5年9月3日、大津城主京極高次が大津城で籠城を開始しました。当時、徳川家康を中心とした東軍と石田三成や毛利輝元を中心とした西軍が全国各地で戦っていました。高次は西軍の一員として金沢の前田氏(東軍方)攻めに出陣しましたが、途中で勝手に大津城に戻り、西軍に反旗を翻したのです。西軍は当初交渉でなんとかしようとはしますが失敗。その後、京極勢の奮戦もあって大津城は容易に落ちず、焦った西軍は援軍を投入します。この援軍にいたのが、毛利秀包です。増強された西軍は9月13日に総攻撃をかけ、三の丸・二の丸を落とし、本丸まで迫ります。ここで西軍が再度交渉した結果、高次は降伏。大津城は西軍に接收され、高次は高野山へ追放されました。

次にこの史料の内容です。毛利秀包が家臣やぶさきゅうえもんの藪九右衛門に対して、9月13日に大津城本丸の鉄の門で数ヶ所傷を負いながらも手柄を立てたことを賞し、500石を加増する、というものです。

「大津城の戦い」については、かんせいちょうしゅうしよかぶ『寛政重修諸家譜』という系図類や『大津籠城合戦記』という軍記物に詳細に書かれていますが、どちらも戦いが起こってから200年

(翻刻)

今度江州大津城、依押寄、去十三本丸

於鉄之門、数ヶ

所被疵手柄之

段、無比類候、為

其忠五百石

令加増候、弥

被抽軍忠者、

可為肝「」状

如件、

慶長五年羽柴内記

九月十八日秀包

藪九右衛門殿

(花押)

ほどあとに書かれたものであるため、信ぴょう性に欠けるところがあります。したがって、戦いが起こった当時の史料の裏付が必要となるのです。この史料によって、9月13日に大津城の本丸で戦いがあったこと、大津城の本丸には「鉄の門」があったことがわかります。

差出人も注目ポイントです。そこには、「羽柴内記秀包」と書かれています。「羽柴」が名字で「内記」は官職名、「秀包」が名前です。「いやいや、毛利秀包が本名なんやったら『毛利』が名字ちゃうんかい」と思われるかもしれませんが、この史料が出された時点では、「羽柴」が名字で正しいのです。というのも、当時のほとんどの大名の名字が「羽柴」だからです。東軍の総大将徳川家康も「羽柴家康」、西軍の総大将毛利輝元も「羽柴輝元」、東北の大名である伊達政宗も「羽柴政宗」、京極高次も「羽柴高次」だったのです。羽柴(豊臣)秀吉は、有力大名に次々と「羽柴」名字を与えることで「羽柴」一門が日本全国を支配するという形を作りました。いわば、同族経営の形をとったわけです。このやり方は、江戸幕府にも引き継がれ、江戸時代の有力大名は「松平」を名乗っていました(例えば、伊達政宗は「松平政宗」など)。

毛利秀包は「三本の矢」で有名な毛利元就の九男で当時久留米(現在の福岡県久留米市)城主でした。現在でも久留米市は福岡県内で福岡市、北九州市に次いで人口が多い市です。そのような重要な地を治めた秀包も、もれなく「羽柴」の名字を与えられて、「羽柴」一門になったわけです。

他にも日付や文言などまだまだご紹介したいことが山のようにありますが、紙幅の都合上、残念ながらここまでしておきます。もっと詳しくお知りになりたい方は、お気軽にお声がけください! (学芸員 五十嵐正也)

『これくしょん別冊 大津絵蔵票集』 やまのうちしんぶ 山内神斧画

昭和35年(1960) 13枚 縦11cm 本館蔵

大津絵はポップな姿にアレンジされると、ほぼコミックキャラクターかと思えるがうばかりの現代的な魅力を放ち始める江戸期のキャラクターですが、昭和の木版画の本作もそのひとつです。一見するとカードアイテムのようですが、キャラクターの余白には何やら文字があって、よくみると「藤之助蔵書」、「さかもとぞう書」、「なかむら蔵書」とあります。そうです、これらはカードではなく、本好きの人々が、自らの愛蔵書の証に、本の見返しに貼り付ける蔵書票なのです。蔵書家は自らの世界観やモットーにちなんだ図案や図像を木版画家や銅版画家、画家などに依頼し、何百何千枚と摺り出してもらうわけです。

当然、知られた蔵書家については蔵書票も有名で、その世界のコレクターは蔵書票を見ただけで大興奮なわけです。蔵書票の歴史はルネサンス期のドイツ（デューラーやクラナハも手掛けた）に始まりますが、近代の版表現による凝りに凝った蔵書票の時代を迎えると、蔵書票それ自体が作品としての地位を確立します。そうして、新作・創作の蔵書票を、コレクター仲間の間で交換する趣味の会が、20世紀以降は世界規模で開催されるようになりました。

日本でも、江戸期から明治期までは、蔵書印を捺印して寺院や蔵書家の収集本の証を示していたのですが、大正年間に竹久夢二や武井武雄、川上澄生などの創作版画家たちが、洒落た図案やノスタルジックなモチーフによって一気にモダンな蔵書票を手掛けるようになると、本好きの日本人や趣味家の間でも急速に普及することとなりました。

本作は、日本画家・編集者にして美術商・趣味家の山内神斧（金三郎、1886-1966）が企画した大津絵蔵書票です。彼は、明治45年（1912）1月、日本で初めて大津絵の展覧会（出品総数32点）を企画し、自らが経営する美術店「吾八」で開催、図録も発行するなど、柳宗悦の民藝運動に先行して近代人として大津絵を再評価した先駆者です。本作自体は昭和35年の版行であり、移転を重ねて東京有楽町で開業した第三次「吾八」時代の企画です。かつて、戦前の『主婦の友』編集者時代に神斧は、数々のノベルティ企画を成功させ、発行

部数を伸ばすことに貢献しており、本作にも、そのような神斧のアイデアが反映された楽しい蔵書票です。大津絵キャラクターの図案を描いたのは「金」の印や「きむ」の署名から神斧本人とわかります。

本作は、戦前の第一次「吾八」時代から店の会員向けに発行していた木版摺限定版会報「これくしょん」の誌上にて、オリジナル蔵書票として募集したものです。全部で13名分の応募があり、個々の蔵書票は応募者の元にまとめて届けられ、それ以外に全種類が貼り付けられた冊子が蔵書票コレクター向けに限定20部頒布されました。ちなみに、本館蔵品のエディションNo.は「2」です。なお、発注されたキャラクターは、女虚無僧、鬼の三味線弾き、天神、鬼念仏、地藏尊、鬼念仏、阿弥陀仏、絵馬、立花、文読む女、太夫、藤娘、瓢箪鯨となっており、美人系が4種と多めですが、結果的にバランスのよい、多彩な図案の蔵書票シリーズとなりました。

(学芸員 横谷賢一郎)

